
美しい国

氣楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい国

【Zコード】

N8133C

【作者名】

氣楽

【あらすじ】

人間関係に悩んだ青年が病院を訪れ、綺麗な女医に診察してもらいながら心の病を治していくという話です。

(前書き)

作中の総理大臣と安倍元首相は関係ありません。

++ -〇××年×月×日 ++

ある老舗高級料亭の一室。

高そうなスーツの着こなしで育ちの良さを知らず知らずのうちにアピールしている中年男性と白コリを連想させるドレスで清楚を打ち出した若い女性が食事をしていた。

和やかとはいえない張り詰めた空気の中、一人は机を挟み、向かい合つて座っていた。

この場の空気を変えようと最初に話しかけたのは中年男性のほうだった。

「私の掲げた『美しい国』とは省略した言葉で本当はもっと長いんですよ。知つてますか？」

中年男性の発言を険しい表情で聞いていた若い女性はその内容に酷く驚いた。

「え？ すみません、分からないです」

「そうですか、ではヒントをあげましょう。…国は人で成り立っている、です」

中年男性はなおも親しげに話しかけている。逆に若い女性は困惑しきつっていた。

「国は人で成り立っている…ですか、んー美しい国は人でなり、あれ可笑しい？ …美しい人…で国は。あつ！『美しい人の国』ですか」

「正解！ と言いたいところですが違います。おしいですけど、まだ足りません。」

もう限界だと言わんばかりの彼女は思い切つて重い口を開いた。
「…すみません、話が見えないのですが、これはどうゆうことなのでしょう。まさかクイズをするためだけに日本の総理大臣である

あなたがわざわざ私なんかをここに呼んだ訳じゃ無いですよね？」

「お気に召しませんでしたか。前置きであなたの緊張をほぐして差し上げよつと思つたのですが… しょうがありませんね」

そう言つて残念そうにうつむいた中年男性は脇に置いてあったファイルの中から紙を取り出し、そつと机の上に置いた。

+++++

人の歩く音、遠めから聞こえてくる話し声、でも僕の頭にこびりついて離れないのはクーラーのゴーという音。わりと静かだけど落ち着かない病院特有の雰囲気はここも健在だ。

僕は受付にいる看護婦のおばさんに言われるがまま、自分の番がくるのをただ座つて待つているだけ。

暇であることが無い。座つている長椅子に寝転がりたくとも流石にそういうわけにもいかない。

あまりにも暇なので受付窓口周辺に張つてある予定表やら健康保険証変更のお知らせなど一通りの文字に目を通した。が、もちろん面白くもなんともない。それなのに、まだ暇は腐る程余っている。 しううがないので待つている患者さん達の観察でもして時間潰す事にした。

さてと、それじゃあまず、ひとつ前の席にいる若い女性から。おそらく彼女は二十代だろう。けど装いは落ち着いているというより地味過ぎて根暗っぽい。熟女に憧れていらしか知らないがもう少しオシャレ考えたほうがいい。

まあ、服装については僕も人のことは言えないのだけど。

彼女は僕の視線に全く気付いておらず、本に夢中になっている様子。多分彼女は学生時代、勉強ばかりで遊ばなかつたから、人付き

合いに苦労してここに来る羽目になつたんじゃないだろうか？なんかそんな気がする。

よし、この調子で行くか。

えーと、次はさつきの老けづくり女のそらに前にいる人。髪の長さからいつて男性だろう。彼はイヤホンを装着しているために何となく若者に見える、でも後頭部のモジャモジャと細身の背中しか見えない今、断言はできない。彼が呼ばれて立ち上がつたら絶対顔を拝んでやるうと決めた。

そんな一人を見て思つた事がある。本に音楽。暇つぶし対策がいりという事だ。

でも僕以外にも対策をしてない人が二人、僕の隣にいた。だがその二人はここにいる誰よりも楽しそうに時間を過ごしている。それはなぜか？ 一目瞭然である。地球温暖化を推進しているかのようにイチャついたカップルだつたからだ。わざわざ僕の隣に座るなんて最悪だ。不細工同士ならまだ許せる。が、二人は美男美女だつた。

唯一、暇を持て余していた僕は窓の景色を見ているふりしながら隣のカップルを観察していた。正直言つて今の僕にとつては毒しかない。心の病に苦しんで薬を貰いに来たにもかかわらず毒を渡されるのだからたまたものではない、でも嫌悪感に勝つた好奇心から観察は続行中だ。

僕の勝手なイメージでは、こここの科は病院内でも浮いている存在な気がしていた。

類は友を呼ぶ。ここに来る人は必然と浮いた人達ばかりなのだと思つていた。

なぜなら心療科に来るということは自分のことを人間失格です、と認めているようなものだ。だからこそ僕は五年もここに来るのが遅れたのだ。プライドが邪魔をし、えらく遠回りしてしまった。

だが諦めてここに来た僕と違つて彼等は気軽に立ち寄つた感があつた。コンビニがわりで病院に涼みに来ているのではないだろうかと思えるほどに。まったく理解できない人種だ。

どうしても内心カツプルに毒づいてしまう。その原因のほとんど嫉妬で出来ていると自分でも分かっていたけど止めるつもりはなかった。なにしろ僕は人間失格だから。

以上観察終了。

僕を含めて五人か。思つていたより多いな。

ここ山崎医療福祉大学付属病院には屋上にヘリポートまであるここいらでは大きな病院、なはずが、心療科は小さく受付の前には三人用の長椅子が三つだけ、しかも追いやられたように三階奥の突き当たりに位置している。追いやられた僕はまだ呼ばれない。隣のカツプルを見ていたからなのか、暇すぎるからなのかは分からないが、だんだん苛立ってきた。

苛立ち抑えていたらその時、『ガチャ』って音がしたので診察室の扉を見た。すると中から白衣を着た女性が顔を出していた。

「南野春花さん、お入りください」

僕もしくはモジヤ男性のどちらかが呼ばれるのを期待していた僕にとって、女の名前は論外だ。また追いやられても、もうする事はない。

「はい」

蚊の鳴くような声とともに老けづくりな女の人が扉の中へ吸い込まれていく。僕はそんな彼女を恨めしそうに見送っている。彼女のほうが先に座つて待つていたので当然と言えばそれまでだが、今僕にはそんな理屈は関係無い。

まだ暇は続きそうだ。新たなる暇潰しを搜すことでの暇潰す事にした。でもすぐにその必要も無くなつた。

「ねえ、今日は何でこんなところなの？」

「内緒」

急に隣のカツプルが小声で話したからだ。一人を今まで心の

中でけなしてきたが今の二人は救世主様に見えた。一人の声が神のお告げと思えてくる。僕は一字一句聞き逃さないよう必死で聞き耳を立てた。

「嘘ばっかり、教えてよー」

「ダメ、ここは俺にとつてのオアシスなんだから」

葬式にアロハシャツで来たかのように、この場に似付かわしくないカップルはなんと、ここの常連をほのめかせている。驚きつつも、僕はなんとか平静を装つた。

「何よ、もう！」

カップルの彼女があたふくになった。彼は慌ててフォローし、それを見た僕は内心鼻で笑っていた。

「いや言つちやだめつて規則なんだよ

「何で？」

彼女は首を四十五度に傾げ、また僕は鼻で笑つた。これじゃあ可愛いを通り越してマヌケだ。

……やっぱりけなしてしまひょうだ。

「何でも」

その後もブリブリ彼女は何度も繰り返し聞いていた。しかし、彼は決して口を割ろうとはしない。

まさか本当にそんな規則を守つているのだろうか？

医者に守秘義務があるのは当然だが、それを患者にも強要させるものなのか？

思わず首をかしげそうになり、ハツとした僕は我に返つた。

まあどっちにしても僕の場合、誰にも言つつもりなんてないけど……なら、まあいいか、どっちでも。

バカップルにも飽きたので携帯電話でゲームをして残りを過ごすことになった。最初から携帯いじれば良かつたかも、と今更思った。

五分後、扉からやつと人が出てきた。もちろん老けづくりな女性だ。でもなぜか前とは違う気がする。よく見ると顔は少し笑っているようで、僕はこの時初めて彼女が美人だったと気付かされた。彼

女はまるで幸薄オーラを脱ぎ捨てて幸せの階段を登っているように思え、僕は小さくなつていく彼女をいつまでも眺めていた。

「川西冬真さん、お入りください」

よし、僕の番がついに来た。

「はい！」

彼女の変わりようを見て僕の期待と緊張は高まっていた。ここなら僕は変われるはずだ。

扉を開け、一步踏み出す。白一色の清潔感溢れる部屋には机と椅子が二つ。その内の一つ、背もたれ付きのいい椅子はさつき僕を呼びに来た白衣の女性が座っている。

他には誰もいない。どうやら彼女が先生らしい。

「どうぞここにお掛けください」

優しくおつとりした声で先生は言った。

「はい」

「そんなに硬くならないで気楽でいいですよ

「はい」

さつきから返事しかしていなかった。僕の緊張はピークに達していた。元々人と話すのが苦手なうえ、相手は予想外の若い女性だからだ。落ち着きを取り戻すために鼻でゆっくりため息をついた。その間先生はずっと僕の顔を見て微笑んでいる。鼻息が荒い人だと笑われているのか、それともただ笑顔でいるだけなのか分かりかねる顔だ。

「川西さんは今日どうされたんですか？」

鼻ため息で少し落ち着いた僕は先生の口を見据えて答えた。

「人よりイライラしてしまうんです」

先生の眉があがつた。僕は続けて言つ。

「あーえっと、イライラするべきでない時にイライラしてしまうんです。えー、例えば友達と遊んでいる時とかに」

先生は小さく何度も頷いた。

「何しても楽しくないのですね」

「ああ、全く楽しめないわけじゃないんですけど、まあそうです」

「それはいつからですか？」

「高校生の頃からなんで五年ぐらい前からですね」

その後も先生の質問に答え続けた。始めはガチガチだつた僕もいつの間にか自然と喋れている。診療に来たといつより学校の個人面談に近い気がした。

「愛想良く振舞つてゐるつもりなんですが、しまいに疲れてしまつて」

「それで人間関係が上手くいかないというわけですか」

「そうなんです。楽しそうにしすぎて好かれたら面倒ですし、かといって嫌われたら孤立してしまつんです。それが職場でもプライベートでもです」

「じゃあ川西さんはどうしたいんです?」

先生の声が少し低くなつた気がした。怒つたかなと思い、先生の顔を覗くと相変わらず微笑んだまま変わらない。それが逆に怖い。

「すいません、好かれ過ぎず嫌われないなんてそんな都合のいいこと無理に決まつてますよね」

「いや、出来ますよ」

予想外な発言に返す言葉が出ず、部屋中沈黙に包まれた。一瞬この部屋のように頭の中が真っ白になってしまった。それでも先生は笑顔を崩していない。

「えつなんて?」

遅れて焦つた言葉は敬語を忘れたまま口から飛び出してしまった、僕はその直後に後悔した。

「好かれ過ぎず嫌われない事も出来ますよ」

もはや言葉遣いを気にしているかどうかの問題じゃない。先生の笑顔は何を考えているのか、さっぱり理解不能だ。

「どうすればいいんですか？」

すると先生は白衣のポケットから何か取り出した。

ん、小瓶？

「これを飲めばいいんです」

そう言つと先生は茶瓶の中から錠剤らしき物体を僕に差し出した。受け取つたものの戸惑つていると、いつの間に用意したのか、机には水の入つたガラスコップが置いてある。

「さあ、どうぞ」

今度はコップを差し出してきた。しょうがなく僕は錠剤を口に含み、水を一気に飲み干した。

「これでもう大丈夫」

先生の笑顔を見ていたらテレビの電源を切つた時のように突然スパッと、視界が真っ黒になつた。

++ 一ヶ月後 ++

それからの僕はまるで別人だつた。

職場の先輩とも上手く折り合いがつけられるし、友達も僕の事を理解してくれた。何でこんな簡単な事が今までできなかつたのか不思議なぐらいだ。

僕は生まれ変われた。そして今まさに幸せの階段を登つてゐる。あと心残りなのはモジヤ男の正体だけ、どれくらい心残りかというとラーメンに入つてゐる支那竹ぐらい。ないと少し寂しくなつてしまふ。でも、それを抜きにしても今のメン（男）になれたのは全て先生のおかげ。

そうだ、明日にでも先生にお礼がてら診察してもらおう。

翌日、仕事を休み、昼ご飯を食べたらすぐに一回田となる山崎医大病院へと向かつた。

心療科には僕の他に一人だけ先客がいた、バカツブルの彼だ。今日はブリツ娘の彼女はいないみたいで大人しく座っていた。やっぱり常連と言つたのは本当らしい。

彼を見て思い出した。前来た時、彼は他言無用の規則があるとか言つていた。あれはどういうことなんだろ？　僕はそんな事言われなかつたのに。

彼に直接聞きたいがそこまでフレンドリーにも厚かましくもなれない僕は、諦めて暇潰し対策用の本を読むことにした。

ほどなくして彼が呼ばれ、診察室に入つていつた。

彼は、『ほうじょうあきまさ』って言ひつい。まるで武士のように古臭い名前だ。でも彼の整つた顔からは古臭いという言葉は似合わず古風といつた方がしつくりくる、と自分で思つてしまつたことに対して腹が立つた。

そして、ふと窓ガラスに映つた自分を見る。せいぜい農民止まりの風貌とそれ以上に醜い内面にがっかりだ。

よし、今日はこのひがんだ性格を直してもらおう。

そう思つた途端に扉が開いた。結局、クーラーの音が耳障りで全然本に集中できずじまいで終わつた。

「川西冬真さん、お入りください」

「はい！」

古風な侍と入れ代わりに農民の僕が扉の奥に入つて行く。すれ違い様に見た彼はなぜか落ち武者のように下を向いている。

診察室は相変わらず綺麗過ぎるぐらい白い部屋だ。僕が入ると汚れてしまいそうで恐い。そんなことを考えながら丸椅子に腰をかけた。

「今日はどうされたんですか？」

変わらない先生の笑顔。

「治していただいたお礼ついでにまた治してもうおつかと思つてきました」

「どうちがついでなんでしょうね

「疑つてゐるんですか？ 心療科の先生ともあらうお方が」

「冗談ですよ」

先生とはまだ二回しか会つてないのにとても親しげに話せるようになつていた。人見知りの僕にとってこの数字は快挙だ。人に言えなかつた自分の悩みを正直に打ち明けたからかもしれない。全くの他人だからこそ言いやすく、加えて先生は人の愚痴を聞くエキスパート、僕を上手くのせてくれているのだろう。

僕は心から先生に感謝した。

「この間はありがとうございました。おかげで今は幸せです」「いやお礼を言われるほどのことではないですよ。これが仕事ですから

「そんなことないです。先生様々です」

「そこまで言つて下さるとわ、本当にありがとうございます」

先生は深々と頭を下げてくれていた。僕も一緒になつて頭をゆっくり下げる。

「それで今度は何を治したいのですか？」

「えつ」

自分の足と床だけの世界に入りきる直前に先生の声がした。急いで頭を上げると先生は背筋を伸ばして僕を見下ろしていくようだった。

「ああ、ひがみっぽい性格なんですけど、治せます？」

「もちろんです」

先生はまた例の小瓶を取り出すと、後ろを向いて「千夏さん」と呼び掛けた。すると声の方向から受付にいた看護婦さんが水入りガラスコップを持ってやってきた。

「はどうぞ」

一人に渡された錠剤と水を飲み込んだ。千夏さんはそれを見届けると来た道を辿るように受付に帰つていった。

「やっぱりまた氣絶するんですか？」

「いいえ、最初だけです。それじゃあ、また何かあれば来て下さい

「あの、一つ聞いてもいいですか?」

「はい」

先生は満開の笑みで頷いた。

「僕の前の患者さん、えらく落ち込んでいたんですねけど」

「患者さんに對して守秘義務がありますのでお答えできません」

僕が言い終わる前に先生はかぶせてきた。その声は今までの柔らかい口調からは考えられないほど早口だ。

僕は面食らつた。気を取り直し、別の質問をしようとした口を開く。

「あのまだ」

「お大事にしてください」

またもや先生にかき消されてしまった。そのせいが生ぬるかつたはずの空気が今は肌寒い。

先生は僕の投げたボールをグローブで受けてくれず、バットに持ち替えて僕の頭上の遙か上を勢いよくかしごぼしているのだ。もうキヤッチボールは成立しそうに無い。

先生の顔は笑っているように見えるが、おでこに『帰れ』と書いてある。

訳が分からぬまま帰るのは嫌だけど、この空気には耐えられないと。

「失礼しました」

帰り道、車内で先生を怒らせてしまった反省をしながら、もうあそこに行くのをやめようと思つていた。

しかし、心療科にはまたまた行くことになるのだった。

++ さりに五日後 ++

「また、行方不明者が出てしました」

仕事から帰つてテレビを何気なく見ていたら、最近いろいろで起き

た連續失踪事件のニュースをやっていた。

被害者は先月から出始め、今まで六人もいなくなつた、にも係わらず警察は犯人の手掛かりさえ掴めていない有様。そんな馬鹿な警察をあざけ笑うようにまた、一人新たに被害者が増えたらしい。

「北条秋雅さん十九歳の男性と南野春花さん二十六歳の女性が昨日から行方知れずのままです」

僕はテレビ画面に映っていた二人の顔写真に釘付けで瞬きを忘れてしまつていた。

この二人には見覚えがある。心療科の患者でバカップルの彼と老けづくり女だ。

全身、鳥肌になりながら考ていると僕の頭の中で一人の人が浮かび上がってきた。その人は白衣を身にまとった才色兼備、その言葉通りの若い女性。つまり心療科の先生だった。

犯人は先生なのか、いや！ 決め付けるのは早すぎる。だが少なくとも無関係とは考えにくい。

警察にこの事を通報すべきか、先生に直接確かめに行くか悩んだ末、直接確かめに行くことにした。確かに怪しいがどうしても先生が悪人とは考えられない、いや考えたくないと言つたほうが正しい。だが今日はもう夜遅いし、ちょうど明日は休日。朝一心療科に行くと決め、そのために早めに寝床についた。が、結局興奮して眠れなかつた。

「川西冬真さん、お入りください」

先生の声がした。今日はぶりつ娘も来ている。その顔は険しく、ぶすつ娘と化していた。おそらく彼女も僕と来た目的は一緒なのだろう。そんな彼女を見ていると先生を信じる気持ちはどんどん揺らいで崩れ落ちそうになつていく。

僕の疑いの目は診察室の扉を捕らえており、そこには小さな字で担当医と書かれたネームプレートがある。だが肝心の担当医の名前

は書かれていない。今更気付いたが、ますます不信感が募る。でももう遅い。

「はい」

立ち上がり扉のノブを回す。手が震えて上手く回せない。なんとか中に入ると、変わらない景色がひろがる。やっぱり先生は座つて微笑んでいた。

その顔を初めて見た時も緊張と不安が溢れそうだった、けど今はその比ではない。とっくに溢れて吐きそうな程気持ち悪くなっている。

その不安は正しかった。ここその後すぐに理解できた。

「ばれてしましましたか。手荒になることを先にお詫びします」

先生は僕の顔を見るなり丁寧にお辞儀をしだした。
それを見て『ヤバイ』と僕の全細胞が警告してくる。
即座に逃亡を謀る。

がしかし、失敗。

それは後ろに退がるとする意思とは逆に、体が前のめりに倒れこんでしまっていたからだった。

！？

痛みもなく声も出ない。

椅子に座る暇なく何が起こったのかさえ理解できなかつた。
診察室に入つて一分足らず、僕の意識はあつけなく闇の底に沈んでいった。

僕は死んだのか？

暗闇に閉じ込められていた僕は以外に冷静だつた。死ぬ前は走馬

灯のように記憶が甦つてくるというけど何もなかつた。その事だけが心残りで後はどうでも良かつた。

自分なりにこの世との別れをしていると突如、地平線のように横一筋の光が現れた。真っ暗闇の中にあるためその光にはどうしても惹きつけられてしまう。光の筋はゆっくりと、しかし確実に太くなつていく。そして闇と光の比率が五分になつた時、光の奥から人影が表れ、人影に気をとられた瞬間、闇は完全に消え去つていった。

「y&#257;-k la b&#257;s
?」

意味不明な言葉は人影から発せられている。

次第に光に慣れ、ぼやけていた謎の人影は次第に鮮明になつていく。

「はああ、外人？」

「y&#257;-k la b&#257;s
?」

人影かと思つていた者はスキンヘッドの黒人で寝ていた僕を間近で睨み付けている。

ここはテントの中のようだ。逃げようと上半身を起こすが黒人体を押さえつけられて動かない。

僕は当然パニックになつた。

「怯えんでも大丈夫じゃけん、あんたのこと心配してくれよるだけで」

どこからか変な訛りの日本語が聞こえ、声のした先にはモジヤモジヤ頭のおじさんが立つてている。

そのおじさんは黒人に「もうオーケー」と連呼しながら身振り手振りで訴えだし、それが奇跡的にも伝わつたらしい。黒人はすぐにテントから出て行つてくれた。

「これでええか？」

おじさんか近寄つてくる。

「……」

僕は上半身だけ起こし固まつていた。

「無視かい！」

そんな僕におじさんは声を荒げた。でも顔は笑つてゐる。

「え…いや、はー」

「分からんことあるづ。今暇じやけん答えてやらい、言つてみ
目の前にいるおじさんは終始笑顔だ。そこは先生と似てゐる、で
もその笑いは種類が違つた。ニタニタしていく小馬鹿にしてゐるよ
うな顔だ。

「…………ですか？」

おそるおそる尋ねたらおじさんは即答した。

「アフリカ」

突拍子も無い答えに僕が驚くとおじさんはいたずらっ子みたいに
喜んでいる。

「放心状態ですつて顔しとるな、まあ無理もねえわ」

そう言つとおじさんは僕が聞く前に説明し始めた。

「今まであんたが飲んだ薬は軽い麻薬みたいなもん。一時的に脳を
痺痺させて、楽しくさせるだけ。本当の目的はその後アフリカに連
れて来てボランティアしてもうつ事。実はこのボランティアこそが
本当の治療なんよ」

「何言つてんだ。」このオッサン」つて顔しているであらう僕の事な
どお構い無しに、おじさんはまだ話を進める。

「ちなみにあんたの病名は贅沢病じゃつて。甘つたれ過ぎて心が弱
りきつとるだけ。そんな奴が今、日本には山ほどおるんよ、俺もそ
うじやつたわ。治るまでは日本に帰れんけど、ここはいつも人手不
足じやけん、いつまででもおつてええつて、良かつたな」

振り返り背を向けたおじさんの後姿に、僕は何故かデジャブを感じた。

おじさんが出でつた後も僕はしばらくテントの中にいた。外からたまに聞こえてくる呪文じみた声のせいで金縛りに遭つたようになってるが動かない。

脅えながら周りを見渡していると、布でできた壁に飾られている額に目がいった。テントには全く似合ってない、高そうな木でできた額縁の中は日本語でこう書いてあった。

『美しい人だけの国』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8133c/>

美しい国

2010年10月8日15時15分発行